

D-5 乳幼児健全育成のための諸要因の分析的研究 (その2) 食保育の実態

東京学芸大教育 宇賀神フクロ井上義朗 広島大教育 瀬之ロシミ 山形大教育 長岡佑 富山大教育 秋山露子 昭和女大家政 原田富士子

目的 子どもの食に関する問題として、その栄養攝取基準、しつけ、偏食など個々の問題については、それぞれ各方面から数多くの報告がある。しかしながら、食保育としての多面的な観察は少なく、親の生涯教育をふまえた食保育観は、家政学上有意義であり、且つ重要であると考えられる。

方法 協同研究者 原田が述べた方法に従って集計、観察した。

結果

- (1) およそ75%の母親は、子どもの年令や体格に見合った栄養基準を考慮して食餌を与えているが、この栄養に対する意識は、家事・育児に専念しているものや、学歴の高いものほど強い傾向がみられ、職をもつものと、学歴との間に有意差を認められた。
- (2) 必須であると思われる食品は、牛乳・卵・獣肉・有色野菜・果実・みそ汁・米飯などが共通しており、地域差はみられない。バター・チーズなどの脂肪攝取が、山形に少ない傾向がみられた。
- (3) 同食で、時間をきめて与えているもの、栄養のバランスを考えて与えているものは、学歴の高低に有意差を認め、低い親では時間をきめず、子どもの欲しのままに与えている。
- (4) 子どもらの乳児期の栄養は、母乳24%・人工44%・混合32%で、母乳栄養児は東京に少なく、大学卒に少ない傾向がみられたが、年令や職業の有無には差がみられなかった。
- (5) その他、食卓を囲む家族構成、子どもの朝食夕食の攝取状況、幼児食によく使う調理法、インスタント食品の利用、外食などについて考察した。